へ13
2925
5

門へ13
號2925
巻5

昭和九年七月六日
購求

春色田家の花巻之五

江戸　爲永春水著

第九回

伊勢物語ハ昔男武蔵國まで迄歩行けり扨て金ハ或
女をよばひけり父ハ他人ハ配合と言けるを母ハ人ハ
ふつけうなる父ハ色を人ハそ母ハ藤原氏なり扨ハ尊
人なるゆと思ひける代賛ぶねハよくそおくりける住所ハ
入間の郡こうのくまなりける

ようしのくたのむものかるもひとふるふ

きゝぐ　方ふぞ　ようををくなる

聟ぶね返し

家　うゑふとうるをるくるこうしの

あのむのかうをうらうまれん

他の国ふそも　猶　うるるるんやまざうける　実

男女のゆさづふ　今もひろしも　うふぎして　赤ぞぐく

同乳せふ　さまぐふ　慣くぬ　外むべきうのくあるふいわうぐ

皆をまつくふ　宿世しうしぞき　約束の退れぬ業ぞと

男ふうまき　信も　実に村のる大尽　栄の屋の進とふ人の家ふ

止宿うるお宝ふ　言ふ　根深をして　先祖も　有も　平間

村うる清く助の方へ　引　お子代とのふ　女ふ　對面くく　委しく

生宿みて　受　福んと　外方ようう　言ふ清と　外ふ二人を連て　実に

と言ふ又一人の男女ば　本町の家へ　帰して　お春の兄の方へ

知らせ　来ふしけるゞ　お宝の兄　家二三軒と　ふふ　俳名　花漢

ほとび　風雅ふ　酒　飲うる　生　月　みて　女ふ　好ふく　男同　俗　去

まべこそお宮の友達なるお光ハいろ〳〵ゝ家三郎ハ幼を
うけて他人知らず哀こゞまし〳〵ゝ然れの縁者へ養女ハ美
人ゆき形〳〵淺も朝夕家三郎を慕ひ居る中ハ養子ハ
形〳〵家のあ親ゞ欲ゞ添くお光ハ不治の癩人同様
なる男を智ハまる物集充持家金を実ゞ影へ来るゆ故
養父母ハ只その金ハのゝゝゝゝゝ人ゝて継ゝハ言ハゞゝも
お光のおもゝくゆゝゝゝゝゝ

然し一度で出行しては跡のお光と京三郎の外は後女下女
下男迄人数の者ども頼みても出きぬお光の乗ひきと
京次郎も妹お雪が情無しぶく立そとよろこぶゆ
えんりさても お雪は平右衛門行て泊ふに脱ぬ甚夜も更
刹るに成ども京三郎は源屋の屋敷に寝床をのべけ
お光は奥の方に床をとりて例の風情ぶ変りなく奉公
人ども夫とさとらぬ様に振ふ所ぶ京三郎人
挨拶して別床ぶ入ける情夫異ひなる男女の
縁を隔てを切ふ行きぬ
おく落合て明日は初ねど今宵はまづお光京三郎が
年月の思ひを遂ぐべきおもひにうつやましくも情ぶて
けり脱ぬ夜も深くと更ゆく清をうぐいすの
子刹ふりしば勝なの方もひつそりと寝ぶまう
なる田舎の家世ろは幸く京三郎は情なの
隔まば京三郎は引ちゆふ紀出ものびくて奥の方へ
ぐり伝ひふ隔紙をさぐり明けつ二郎ぶ越て行くる

八百さのるの中もどめて仏者めろバッタりと突当りおりもひ
ぐけねばどりゝ　京ヘそり乗妹のコろへ捨ぐゝトろ人
ゴ表ろふるまこバ突当りゝ人もやうゝ気をあぐめてる
アゝ引　姉ろこ然へ仕作ハ亦さん久　京ヘヤお光さん久
まゝ惰ふゝひねゝ私きやアモウゝ仏様ふ勝を洗ゝ
まゝさらうハット思ひまゝけもでも変を立ゝ猶ろる
ろらふと存知て皇をとゝて縮鼻ふりまゝゝ　京ヘイヤ移
お茶ぐゝハ気が付バ盗人が遠入ろうと思ひて脇指

姉ろこ暗闇で燈火を持ぐふ仏所へお出成のご豆　京ヘイ
私ハアノお意所へ方燈のおゝ油ふ来ふまりまこョ
さんハお燈火もお持成ふで仏ゝやゝを仏方へお出成
成まこのでぐふまこゝ人ト言こてギックリ亦三郎仏の利ふる
言ふらこ返言ふ出来ねて　京ヘそ仏サ私の用ハアイ
そこ三ふサ笑ふ仏ガ　京ヘホゝゝゝ亦さんハ寝ぬて
お在ふまこうまへ仏ふとだろり仕作ハ私しハ
出ふ　京ヘホゝゝゝ笑ひるてハふ思ハ

雛鶴も
真柴庵

宝で寝所を起て砂をうち撒らせ
ちまち消ハ死で仕舞
乳で来るのサ　ア　イヤ　何を　そんな　お思ひ込で覚悟
をして仏くやみへ　姉ひのふ出て　お至成ってのでござりまし
京コレサ　お光ぎん　そんな　義かう入　見体をしてお出でなくの
ても能じゃノうひらト　寄をんバ　姿ハ見えねど　暗闇ふても涙
まハわらね　梅ゲ香の　芳りふ　惰る　仙女香の　化粧の白ひかの
めきて　肌ふハ　ふ　花橘　處女香の　功能　深く　ふ　ふ
梅の雪　ゆゝ　き　常の　身　ふ　ふ　真の美人と　貴ぶべ

閑ふ　よって　言　右ふ　ふ　ふ　藥ハ　女中　流の　常ふ　用ひ　ふ
ふねバ　ふ　ふ　化粧の　ふ　又　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

○美艶仙女香當世白粉の第一番　南傳馬町　坂本氏製

○洗化粧の花橘　浴ひ入　小伝馬町　丁子屋店

○處女香　肌の　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

嬢しさと二度顧みうえん今宵より東くの門を潜り初め
と涙ぐしが寒き衾を秀逸ありあるふお光と京三郎は長き
月日を相愛の男ひも遂ぶ義ひしが今宵結ぶの神ぞ
至ふたりぶ一家ふ止宿合せ〜身の逢見寝物語ふ
うちとけて哀しさ堪ぬ浅瀬ハ勝手の人目関太ぶ
憚りるまふわらざれば元の産業ふ別れ初ふ顔で
ありけるが主や伊女ハ起き出て雨戸をとう明るる毎の掃除
せとる指よりの家来三郎ハ起て勝手ふ立出ず公人ふ接

拶せ指ようくし食ひ物ふ侍女ふ京へ入ッお咲きん私
ちゃア旦那のお相手ふ成さ本の中の間へ参ふるうら
奥の方ふ居るヨ用がある為ふ呼出して
呉んなそしてお安ふ指をあげて赤まるつてさらば逢も
旦那の留守ふ宿ゆりをまるふ乳ふ入て出と門の外へ
出て拍ぶ成へハイ参りがふどざるまして左衛門ふ
出賠をあまさんまいらふ新田まるふお神楽あがるまして
とやまるふ公家ふ二人で参りふどざるまして京左

ねつきれしやうお泰ゝ中ゞ能あるゝ。あるゝ一人男の顔がみるゝ
ようる廿人さく〳〵ゝ〳〵〳〵〳〵ゝ張なるゝ八存ぜいまん京ゝ〳〵
なんでもいろゝ行る廿人仕舞ハ前字をして居るゝゝ。ゝゝ樓
助どんと一助どんお泰達ハ仕舞が酒をふるまふぜ一樓〳〵
ゝゝがふどぎるまして私どもハお神楽ゝゝハ出酒の方が
宜どぎるまして〳〵〳〵〳〵京ドレ本の測べふゝゝふゝ本〳〵
泰さんお泰さんハ今月ハお眼がちゝ〳〵して出本ハ多り
まして京〳〵〳〵〳〵後ゝ宿なるゝをいふのゞ分も眼の

ちゝ〳〵樓るおゞ人ハるゝがトまゞゝふの人ど公中ゝハ
ゝや夜中の一件を知門てのふゝとお咲の顔をいぶ
ゝげふ泳ぎれバお実ハ元来泰ゝこ泰ゝとゝゝやまく
小方とゝふ情女のあるゝゝも委〳〵新て居るゝ少衆
笑ひゝゝ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵泰さんがてア老実な顔を出
成てサ手樓ふ精を出して夜も寝ゝ書物ゝゝふ
ゝゝてお在出成と小方さんの新〳〵言葉ふ泰ゞまして
ゝゝ〳〵ト言ふ立て泰ハまして〳〵〳〵化の

奔公人ふまで帰ら[illegible]て八大変ありしとお供ふ用くばせ
ありて奥へ入り隠居の老書を奥の座敷へ持行ける
樽出して市ゑど女房て居る中ふお光も起出て食の
も涙 侍女と下女さらへ拵び ふ出り 下男ふへ京三郎ふ
酒を買そのふひ[illegible]ふ男 ふ入て酒盛[illegible]て[illegible]の
ちくけるが京三郎へ一万ふて書物をくり[illegible]居る
前へ立入来るお光の[illegible]ぶと今までよりへ公ふ向て
十分ふ化粧[illegible]こびるくたりの色殿ふて京三郎が書

物を[illegible]ふ栗いぶして居る側ふ手寄完命と笑ひ
ふへ[illegible]ふ本ハお止なさるな 京へイヤ別[illegible]お笑話く
ふ化粧が出来ます[illegible]ふ法方の人が乳[illegible]
ましょ ふへ[illegible]法方と仕作のへ仏所でどざる[illegible]私
くしへ世[illegible]を出[illegible]見さるへどざる[illegible]ん京へおまへい
ふ[illegible]先の人逢へ見る毎度ふ逢所て
居ます と申 ふへイヤ 仏様ふて[illegible]まして私がお[illegible]
暴ふ振ふ[illegible]とゞ見る[illegible]の中ふどざるこせんハ又

嘉さんが小方さんを可愛がる様ふ女を信切ふ成
お方ハどざるませんヨ京へ小方さん深閨の本の中ふ
ある美者さま　こへアレサあてがけでるひお春さんが命ふ
うけてお可愛ごう成成小方さんのうてぎるまたヨト
言ごう笑へ元可愛らしく嫉妬らしく言ひも
しぜん負残と云ふ気質殺ありて いつぐ美累のお光が嫉妬
殊ふ いつしか京三帝の流き別際の小方なる知る癖
明ふ男気の紅色を増うける

第十回

翻話再説京三帝が妹お園へお春の身の上ふ
うまたび高三郎を連て平右村なる清水の家ふ
行く相談せしところ 小橋三郎ぬるられ
どもうへ男が往て嫌ごうもあるべ
けれども お園とお春の代と関左ふて先方へ往き
お春ふ対面して委細訳を聞ふ一度とまたうと
留山のお下屋へいろう 檀くと使命せふ今日ハ

義殿様孫生まれ助さま母様お留守の長間くのて逢ても
とのお文の長書きなど外へ待せお園とおよしばかり
奥へ通り暫時待ちやがてお春様側女を連れまて
出来り「ヲヤ〳〵」とおよしばあんお春様能く尋ねて
お呉なされたとうさまお兼さん達の口添切ハまつく身ハ
とうて嬉しいけれども私さやうに頼れがあれて
一生此お屋敷ハ居りまいどもそ私係を言葉
がとお思ひでありませうけれども住居人ハ

婚姻をしてお呉んなさいヨト宅へ帰り遠うお春ハ言葉の
両女ハあきれて顔見合せ応もせざるしが
モシお春さんお前ハ今此お言のゝ訳も知ぶせ
なのでハ帰ることハ出ざるのあんのこと仮病もまちう
私達ハ訳ハ不分解ヨまア帰るより帰ふ長
よう分根ハ今ハこれで此お屋敷を落付ておる在のゝ工
お前ハお帰りでないもんぶろう分根程元人が来て
もんで強くゝ初まやア来ませんヨ「ヱ三」お園さんの

お言の通り我儘なんぞ我の目も病ばの種ぞかな
夫も為ゆも為ふけて言のやアるいけまどる
きつかう不分解筋ざうう安心ある多いいまお前ぐ
実ふ居ちのうう居ちい居ちいで彩くいふ訳ざうトト
戸委しく話て夫ら伝ぢ変ぐうぐ
気を落付てお前ぐ居ちいといふ事せ私きちふ
なるしてお関せる〳〵なるなど細も言ふなので
帰るちく居ぢのんのく言ちいふ駄ろうさ

うう堪忍してお呉んうさうョアノウその訳ハと言のハ
ト言さして顔赤ぶるかー言ひゆくとりふ思入れ
ゆそさ〳〵貧向を側ふ居る側女の初瀬といふが
さーでの〳〵アレサお春さうふ初公らーいナニ和うーい
変ぐぐる居ちのうう夫ども平女ぐ名乃伝ゆく
うう私が妻女ふ代りて十ませう一体このお春様を
代お屋敷へ引留めてだーさとうふまる細ハな時
ぢや若殿様法生と助さうふが番頭の別荘で不図

お見ぬ　めそぶして　の様ぢ宮一度逢ふと思ひて
ある　矣先へ　お春さんが　ちめぐりめそぶーとんぢ
若殿さんハ大喜びで　片時　お側をおとうーるーるー
花ようの羅紗　お側で見て居る　私　先きへ
のちぶ　思ひ　わどノウ　根どん　ホンニ　初瀬さんの言ふ
通り　月毎　歌　毎のお　膳　浦山　わどお中が
能くモミの　病　でも　ねバ　能いと　お　奥中　で　大
取　ゆ　先　ど　涙　い　お中ぢ　ものを　帰るのが　ぢと

仕方　作も　お乳母　で　おぢる　中　今　ものと　若殿
さんの　代　人　お春さんハ　表向　世　晴
てのお　内　国さん　其　時　私　両女　別深
甲斐文　乃　老女　お中老　お取立　今　頼ふて
居ります　ト　海　両人　関　めさて　ぢ
若殿向　祈　表　人　若殿さんのお帰り
ハット　初瀬　根　「サア　お春さん　お出迎ひ　ト言ふ
お春を　引連　お　国　お　代の　両個　検校さん

山竹色
木主寺
推蛾

そこらの表の方へと走りゆく跡の両女は顔見合
忙然として居るうしろ　モシお代さんお孫方
なら孫らうまエ　今お関の通りでハお春さんの祭
取つて入戸　僥倖の招でハあるけれども見ぐ表向
四間　伽ろ　行ろ言つて住居うぐあげさのうぐば
孫けれども　行ぐろ　ちまりの悪い次ぎるへ　左様
めんまりお春さんも一圖ろ　ちぐ　ちらまちち
悪も角も　松達ぐ　孫うやうて　まさんぐらら

圖根くくの　沢で此四辺　茂み居ろ分孫方ろ
孫ろらうと　根後をあて　お茶を　陸ろ　あの　嬢の
聖　叶ひ　三方四方の　治る　仕孫も　あらうけれども
分をのふうて　一圖ろ　ぐやア　詮方がないわ
鬼ハ言　見ろうの　捨ても　ろうを　分をのふ
若殿さまの　お帰りぐ　あり　ハお春さんの　逢ようろう
ゆくへ　沢ぐろ　一階　住居へ　帰りて　元人の　思案も
関ろう　沢で　分孫　ぐやア　ありません　へ

さぶらうまるとよう他ハ珍方ハありまたまたと言ふぐら
ちかく両女ハ立わかり次の男人出る事所しも待人
知らねど長廊下の小暗き所ハ行くてひそく喋く
女と男お園ハ目ぐやく見るようも差やお春ぐうき
でも乃て居る変もわふんうとお代の袖を引とぐら
ちびハ喋き領きて襖の蔭ハ泉をひそも聞とも知ぬ
好景の男婢　男ハコレ岩浪どの業く有り　合ハせ
通う　孫七ハ大殿を押込さんとれで

代家関ハ我身内　うちびきの遠ふね橋ハ岩浪
園養さん　ハ　如七ハ　私　ひる中　あのお春ハ
うつを　楼氏　茶屋　少家　代泉　の口の七加減でくく
一寸森ハ　仕立あげ　悪のぶう　ハも　栗い　ようあるう
多のう　高ひ　ふふきせ　夫を　落度ハ進掛ふ工夫ハ敬ハ
乃て　ふきうう　さ　乃ふせと　ふきう　ハ常く　物乗
仕て　ふきさ　私の　公の　頼ひ　ハテ　知ふきう　其
時　ふふく　世る　聴ての　代　泉の　女房　岩ハ　亀度　口を

お高さまと申すもんじゃ　番へ番の遠へて終のあり
番へイヤ〳〵申すも言はまいせん　けるもお小姓の歌
江の島　つゝまへて　ちやらくらりやらしの変をあそび
ちさのを　私ハ見て居りまし〳〵ぶ　腰が立てなりまし
ゑんど　此後あんを深さ変をあそび　まし〳〵せんじ
番へ　ニ　わまへハかんの奉公　とりふものご　其方の見物
女がめつて　終へものの　番へ　ちんなら　真実とよくを
番へ　サ　其　澄　枕ハト　耳ふ口　番へフツちんなら　今宵

奥の一間で　番へ　閑暇　猶　待て居やト言ふ　二人ハ
立別れ　奥と表へ　出て　別　踊　見送りて　お園とおみ代
間を見合せて　ホット　喜　お園さん　番へ　ちよ
うつは　出しハさまをいみ工　番へ　おそろしの工　ぶ
ちさんどれ〳〵　今の　私　浦へ　此身達の　耳ふ　這
入さのハまご〳〵　お春さんの　僥倖　ぶら　仕事早く
住居へ　帰つて　お春さんを　取　人を　工夫　なるのが　上
別ごヨ　番へア　私も　終　おもつて　居りましょちん

なふ少しも早く出る工か図ません　さき「了簡なされませう
ト言ながら言訳を待せおきし表の方へと立さげける
作者曰此一回の趣向いさゝか戯場めきたる
条もあれどもたゞ婦女子の為に目先を
替へて流俗とおいぼるやうにものしたるなれば　作者の
用心なきにしもあらねど見ゆるし給ひなんぞ

春色田家花巻之五了

揚太真遺傳
處女香
一廻り
精製桐の箱入

そもそも楊貴妃手術秘方の妙方にて男女に限らず顔の艶をうるはしく
して生まれ付て色の黒きも追々白くなり肌目細かになる功能あり殊に一
夫しらぬ顔の薬世間に多く白粉洗粉化粧水香油薬など数多しそ
皆とゞく顔の薬にはあれども功能書に書しとほりその手付の
十分も功能は速に顕はれ追々しらぬまに久しからぬうちに其功あらはれ一段
すぐれたるうち誠にあやしく不思議なる薬なれば
美しきうちにても忽ちに功能の顕はるゝ妙薬なり一廻り用ひ試みたまへ

色白艶と搗のごとく有り一時用ひるべし行程ふ荒痢の机用も
用二章法のごとく丸を清くとるのこと。也丸ば。丸ば丸て。種物
の丸。もくの新ふーも添ずく洗うそうろうく有ること作食べ。新丸て新と
洗ひこの玉粉を丸を白粉と付ること粉有ること也有ること
白花素色の白くうろーし紅粉ようれい搗ようと糸不及年色しは方が
利ずひそも用に色ばして美くなる製法ゆ来品絵ひうく造用し粉され
真の美人と言うべし

萬永春水精製

髮の艶を髮潤をさくる

妙業 初みがき

この薬を髮に付ればあらしようもうとくなるこうの有

書物兼繪入讀本所

江戸京橋弥左衛門町東側中程

文永堂 大嶋屋傳右衛門